



自称APLA応援団

大友一男 / おおとも・かずお
APLA賛助会員

私は10年程前に定年退職しました。住んでいる常総市は、一昨年大水害に襲われ過疎化の加速も懸念されています。東京への大事な足である高速バスも2016年末で廃止されました。APLAと出会ったのは、偶然が重なった結果です。24時間稼働の製紙会社在职中には心身ともに余裕がなかった私も、退職に伴い余裕ができました。耳にした情報を手掛かりに、集会やイベントに出かけているうちにAPLAに行き着きました。活動内容が私の興味と合致したので、賛助会員になりました。

これだけなら、他のケースと同様、会費を納めるだけの会員のままだったかもしれませんが、たまたまAPLA主催の農業関係の講座に出席するうちに、事務局スタッフと顔見知りになり、各種イベントや総会にも顔を出すようになりました。

私自身はとり立ててエコを意識していません。生来の運動神経の鈍さで自動車の運転はできません。車社会の我が国では、どこへでも歩いて行く変わり者として目立っているようです。年寄りの定番で

ある旅行にも、あまり興味がありません。枕が変わると寝られないという理由ですが、他にも、物に執着がないと言えれば聞こえはいいですが、面倒な事は嫌いな怠け者が真相です。

そんな私がAPLA会員として、何ができるか考えた時に、浮かんだのが自称APLA応援団、実態は事務局サポーターです。現在、イベントやマーケットの手伝い方々、お邪魔しているのもその一環かな？ 尤も、生来の怠け者の私がイベント等に顔を出すのは、自身の楽しみでもあるからで、事務局やボランティアさんと話すことは、刺激の少ない田舎暮らしのストレス解消になります。

他の団体の会員になったり、イベントに参加して感じることは、(特に若者) 動員力の不足です。世の中が変わるのは、古い考えの人間が死に絶え、新しい考えの人間が多数を占める必要があるそうです。若者の政治離れや右傾化が懸念される嫌な時代に、若いボランティアさんを見ると希望が湧きます。強いて、私の描くエコを挙げると、お互いが優しくなれる人間関係かもしれません。■

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 35 2017.02.01

- 02 Relay Essay ポコポコ 35 自称APLA応援団◎大友一男
- 03 **【特集】**
インドネシアのアブラヤシ農園拡大の下で◎頼俊輔
[レポート]
パプアでのアブラヤシ農園の影響◎デッキー・ルマロベン
- 09 **【Topics】**
ネグロスと東ティモールの若手農民が出会った——交流プログラムを実施しました◎寺田俊
- 10 **【Column】**
Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記⑩ パラダイス・パプア◎津留歴子
百姓の100章⑤ 百姓は、タネ蒔きで『緑の地上絵(Green Geoglyphs グリーン・ジオグリフ)』を地球に描く画家◎斎藤博嗣&裕子
カネシゲファームのドタバタ騒ぎ⑤ 地域性とはおもしろいものですね。◎寺田俊
続 Have you ever seen the cinema? ⑤ 『バリ20区、僕たちのクラス』◎重政栄一郎
- 12 わたしの友達友消しまん⑩ 上関の自然を守る会のお魚便の巻◎佐藤友子
- 13 APLA食堂⑥ 有頭殻付きエコシュリンプ◎吉田友則
- 14 **【Voice from APLA partners】**
【ネグロスより】 KF-RC研修第7期生たちを迎えて
- 15 事務局だより

表紙のことば

中近東のアラブ人男性が頭にかぶったり巻いたりする装身具クーフィーヤ。そのクーフィーヤを着用した故ヤーセル・アラファトPLO議長を記憶している人も多いかと思うが、パレスチナでは、単なる伝統文化にとどまらず、イスラエルからの解放のシンボルともなっている。

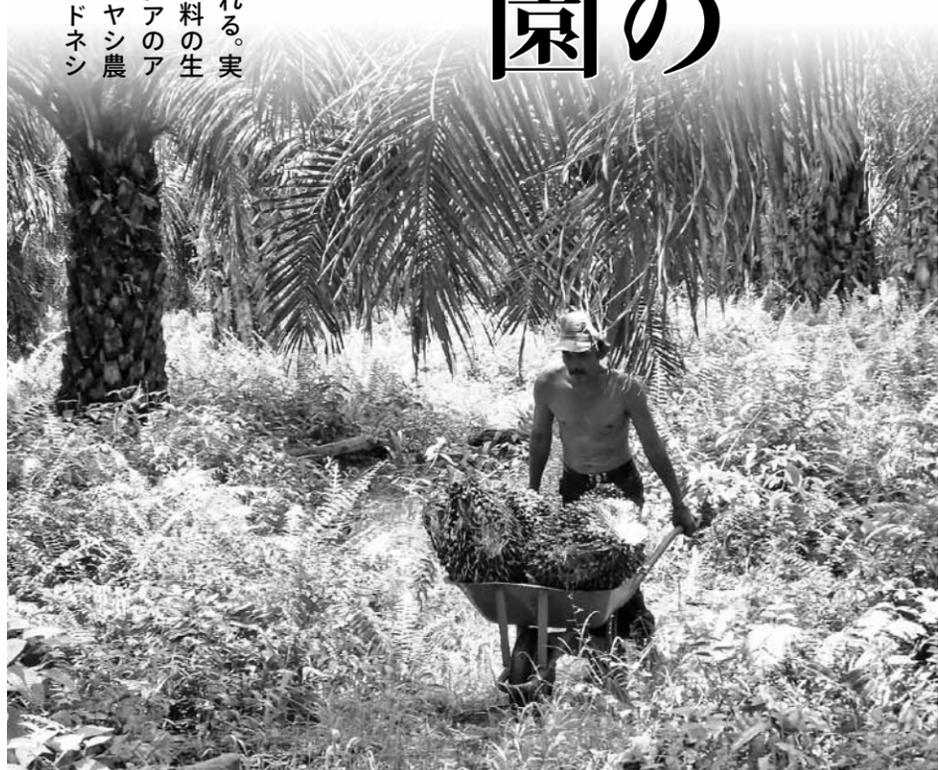
しかしながら、現在パレスチナで販売されているものは、安価な外国製品ばかりで、パレスチナに残った織物工場はたったひとつしかないとのこと。その最後の工場で織られたクーフィーヤを「ラスト・カフィーヤ」として輸入・販売している会社がある。ウェブショップには、オーソドックスな白と黒の格子柄のもの以外に、色あざやかな一点もののストールが並んでおり、眺めているだけでも心が躍る。

イスラエルの占領と分離壁によって閉ざされたパレスチナの地場産業を応援するクーフィーヤで、この冬も寒さ知らずだ。(野川未央)

特集 インドネシアの アブラヤシ農園 拡大の下で

頼俊輔 / らい・しゅんすけ
明治学院大学国際学部教員

「見えない油」とも言われるパーム油。食品表示では植物油と書かれる。実際どれくらい、何に使われているのが見えづらい。さらには、その原料の生産に関してもトレスしにくいのが現状だろう。今号では、インドネシアのアグリビジネスの研究をされている頼俊輔さんにインドネシアのアブラヤシ農園の実態を報告していただく。また、農園開発の影響を受けているインドネシア・パプア州からも現地レポートを届けてもらった。(編集部)



重たいアブラヤシの運搬作業。

現在、世界でも最も多く消費されている植物油をご存じですか？ 赤道付近の国々で生い茂るアブラヤシの実からとれるパーム油です。ここ30年の世界のパーム油生産・消費量の拡大は急激で、オイルワールド誌によれば、2014年の世界全体の植物油生産量1億7400万トンのうち、パーム油の生産量は3分の1以上

を占める5900万トンに達しており、次に多い大豆油の生産量(4500万トン)を大きく上回っています。

世界中でパーム油が消費されている理由は、なんと言ってもその価格の安さ(大豆油の6/7割の値段で、他の植物油脂に比べて、単位面積あたりの油の収穫量が多く、低コストで油を生産することができま

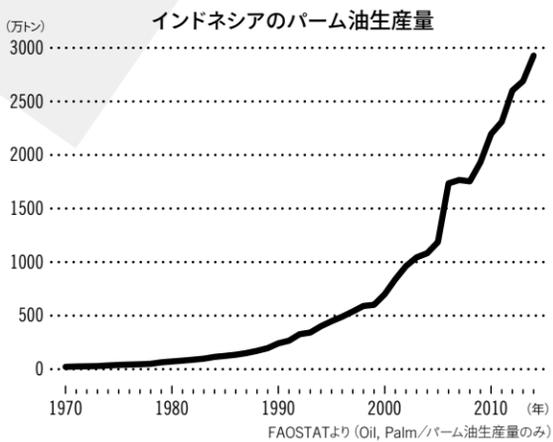
す。これに加え、パーム油の持つ素材的な特性から、加工用途が幅広いこと、酸化・加熱への安定性が高く、賞味期限の長い加工食品に適していることなども、消費拡大に寄与しています。

日本では、2014年のパーム油輸入量は約60万トンで、ここ10年間は、それ以前の輸入の急増が一段落し、安定的な伸びを示して

います。輸入されたパーム油は、食用油として利用されるほか、石けん・洗剤、マーガリン、界面活性剤、工業用の潤滑油など、様々な用途に合わせて加工されます。

**世界最大のパーム油生産国
インドネシア**

世界的に需要が拡大しているパーム油は、低開発に悩む国々にと



かります。2009年、インドネシアで生産されたパーム原油(およびパーム核油)は約2500万トンでしたが、そのうち、そのまま海外に輸出されたのが約957万トンでした。残りの約1543万トンは、国内の精製工場に運ばれ、精製・漂白・脱臭の加工を施されませんが、その後に輸出されたのが約893万トンで、最後まで残った約696万トンが国内の加工工程に回っています。つまり、生産されたパーム油のうち、国内にどどまると、付加価値を高めて製品化される割合は、30%程度であり、それ以外は、低付加価値のまま海

外に輸出されていることになりま
こうした状況に陥るのには、インドネシア企業が加工部門にまで展開する余裕がなかったこと、および、世界市場においては加工部門においてマレーシア企業を始めとしたグローバル企業がすでに寡占的な市場支配を進めており、インドネシア企業がつけている隙がなかったことなどが考えられます。かつて、『アジアのドラマ』で南アジアにおいて19世紀から進められてきたプランテーション農業の構造を描いたミューダールは、利潤が現地での資本源となる代わりに輸出と共にヨーロッパに送金されたことを挙げ、プランテーションはその地域の工業化を進めたのではなかった、と述べていますが、利益の大きな部分がインドネシア国内に循環しないという点は、現代でも共通していることのように思われます。

農民の生活・地域社会への影響

アブラヤシ農園開発は農民の生活や地域社会に大きな影響を与えています。1970年代の、初期の農園開発においては、政府によ

により、経済不振に陥ることになりました。インドネシア政府は、石油に依存した経済構造を改めるべく、経済を自由化し、新たに輸出物として有望なプランテーション作物の生産を奨励することを決定します。1990年から2010年までの間、インドネシアのアブラヤシ農園面積は、113万ヘクタールから783万ヘクタールまで拡大しましたが、その背後には、パーム油にかかる輸出関税の削減やプランテーション農園への低利融資など、政府のパーム油輸出への奨励策がありました。

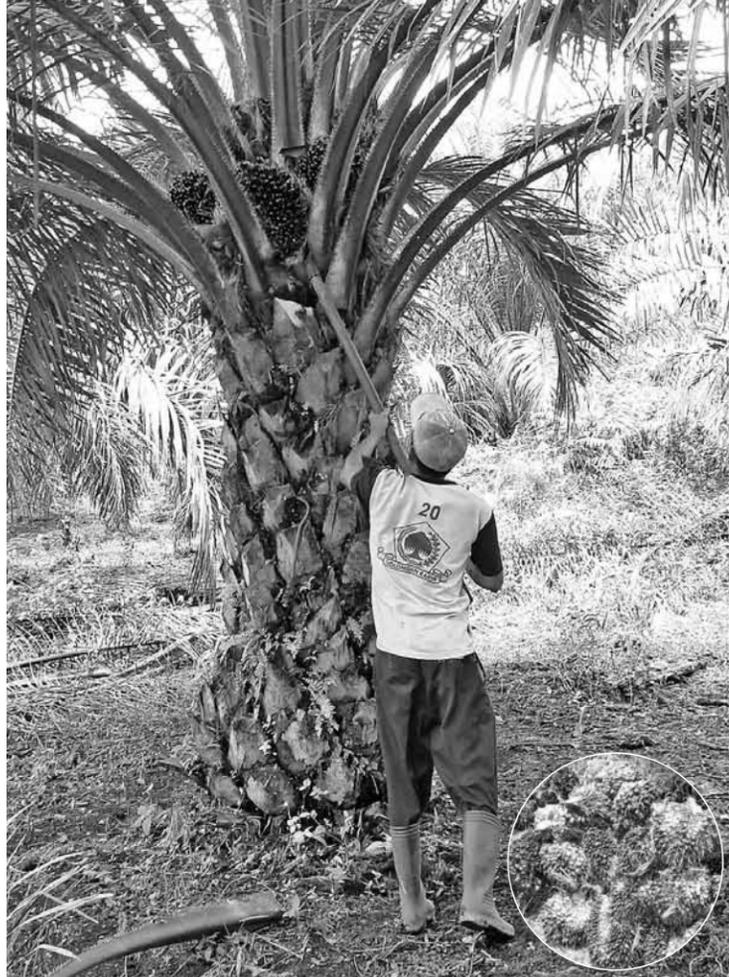
有力資本家による農園経営

農園面積拡大の主役は、インドネシア国内で手広く事業を展開する企業グループのプランテーション部門で、アストラ、バクリー、サリム、シナル・マスといった有力資本家が農園開発に乗り出しています。これらの資本家は、スハルト元大統領と近い関係にあり、製造業、林業、金融業など様々な分野において政府から特権的な地位を与えられてきたという点で共通しており、1998年の経済危機やそれに続くスハルト政権の終

て、大きく変動します。グラフにするとよく分かるのですが、リーマンショックや、中東の政治変動など、およそインドネシアの農民とは直接関係ないような出来事によって、パーム油の国際価格が変動し、農民の所得もそれに応じて不安定化する、という構図が見取れます。農民の中には、貯蓄をせず、こうした価格変動への備えをしていない人びとがおり、買い取り価格が暴落した際には、彼らは、資金繰りに苦慮することが予想されます。

農園開発と地域社会との関係は、土地紛争が各地で頻発していることが挙げられます。インドネシアの土地制度では、地元住民が利用してきた土地は「慣習法」が適用され、土地利用において住民の意向が尊重されてきましたが、スハルト体制以降、林業開発や鉱業開発において、この「慣習法」は尊重されることがなく、逆に、軍による介入を強めながら、先住民の土地で森林開発・農園開発を行うようになりました。

筆者が訪問したスマトラ島中部のある地域で、村や集落がすっぽりとアブラヤシ農園に取り囲まれ



アブラヤシの収穫の様子(右下円内は収穫されたアブラヤシの実)。

つては、まさに救いの神。その生産がもたらす雇用創出、所得向上の効果に期待が集まっており、東南アジア、中南米、アフリカの国々は相次いで、アブラヤシ農園の開発を進めています。なかでも突出したアブラヤシ農園面積を有するのが、インドネシアで、世界全体のパーム油生産量の半分以上を占めています。

の生産が広がっていましたが、20世紀に入り、世界の工業化が進むなかで、天然ゴムとともにパーム油の生産が始まりました。生産が急拡大するのは20世紀後半からで、これには政府の政策的な転換が大きな役割を果たしました。1980年代に入り、世界の企業は省エネ技術の導入により、石油ショックから立ち直り、この結果、原油の消費量が減少、価格も低迷していきます。これにより、逆に不利益を受けたのが産油国で、当時、OPECの加盟国であったインドネシアも、原油収入の低下

により、経済不振に陥ることになりました。インドネシア政府は、石油に依存した経済構造を改めるべく、経済を自由化し、新たに輸出物として有望なプランテーション作物の生産を奨励することを決定します。1990年から2010年までの間、インドネシアのアブラヤシ農園面積は、113万ヘクタールから783万ヘクタールまで拡大しましたが、その背後には、パーム油にかかる輸出関税の削減やプランテーション農園への低利融資など、政府のパーム油輸出への奨励策がありました。

焉においても、アブラヤシ農園開発により着々と経営基盤を強固なものにしています。

インドネシアの資本家の勃興についてスハルト時代から現代まで歴史的に研究したりチャード・ロビンソンは、独裁体制を築いたスハルト体制の終焉後においても、民主的な政治・経済体制が生まれた訳ではなく、特権層による政治・経済への支配は変わっていないとし、そうした体制をオリガークイ(寡頭制)と呼びました。アブラヤシ農園における有力資本家のビジネス展開は、まさにこのオリガークイを支える重要な役割を演じていると言えるかもしれません。

貿易や投資の自由化と、民主化がどのような関係にあるのか、アブラヤシ農園開発は示唆を与えてくれているようです。

原料供出地としてのインドネシア

農園で収穫されたアブラヤシは、搾油所に運ばれ、そこでパーム原油になります。パーム原油は次の行程で精製され、各加工工程に回されます。このパーム油の一連の生産工程(バリューチェーン)を追いかけてみると、興味深い事実が分

てしまっている光景を目の当たりにしました。地元住民に事情を聞く、ある日、突然、農園企業がやってきて、この地域は政府から開発許可が出ているから出ていってくれ、と言われ、立ち退き料として1ヘクタールあたり200万ルピア(日本円にして2万円程度)を提示されたそうです。住民たちは、先祖代々、この地域で漁業や林業を営んできており、移住することを拒否しましたが、その後、強制的に農園開発が始まり、村が閉じ込められてしまうことになりました。それから、川の水質が悪化し、



魚の漁獲量が減少するなど、住民にとって厳しい状況が起きていました。窮状を話してくれた住民のリーダーに、「このことを日本人たちに伝えるね」と言葉をかけて、その集落を後にしましたが、圧倒的な規模で進む農園開発の前に、自分の無力さを痛感したのを覚えています。

その他にも、地域内の農民の、土地持ち層と土地無し層への階層分化や、不在地主化などの問題も指摘されており、これには、アブラヤシの素材的な側面が関係しています。アブラヤシは苗を植えてから収穫が始まるまで3年以上かかるため、収入を得られるまでの間の生活費や、農業や肥料などの投入財の費用がかかりますが、娘の嫁入り道具のための支出や医療費支出があると、資金の手当てをするために、土地を手放してしまう農民もいます。しかし、一度手放すと、土地の値段が上がり続けているため、買い戻すのが困難になり、土地無し層に転落してしまいます。また、一度、生産が始まれば、そこからは、2週間に一度くらい、収穫作業をすればよくなり、その作業を労働者に任せ、

自らは都市で生活する、不在地主化が進んでいます。

深刻な環境問題

農園開発による環境への影響も無視できないほど深刻です。スマトラ島やカリマンタン島の広大な熱帯林は、急速に、アブラヤシ農園や、パルプの原料であるアカシアの産業造林によって、動物たちの生息地が脅かされ、野鳥や鹿、猿の個体数の減少に加え、オランウータン、スマトラトラ、スマトラゾウのような希少動物が危機にさらされています。また、ボルネオ島では、3000種のアリが生息しており、アリはトカゲ、ネズミ、



搾油工場で計量中。



搾油工場前で(右から2人目が筆者)。

に調査に出かけたときも、まさにこの洪水に直面し、付近の住民が避難する仮設テントが通り沿いに立ち並んでいるのが見えました。地元NGOの話では、半年に一回の割合で洪水が起きるようになってきたことでした。

インドネシアならではの環境問題として、泥炭地の開発が挙げられます。スマトラ島やカリマンタン島の沿岸部は、泥炭地という沼のような状態の土地が広がっていますが、近年、開発圧力の高まりによって、こうした地域も農園の対象地域とされるようになっていきます。泥炭地では、土壌中の微生物の活性が抑制され、有機物の分解が進まず、泥炭が長年にわたって蓄積されており、泥炭の中には、炭素やメタンガスが大量に含まれているとされています。この沼地を開発するには、水を抜いて、土地を乾燥させる必要がありますが、そうすると、微生物による有機物の分解が進み、二酸化炭素やメタンガスが大気中に放出されることになり、これは温室効果ガスであり、地球温暖化の進行を促すとして懸念されています。

農園開発がもたらす社会問題・環境問題に対し、政府レベルから企業・市民団体レベルで、様々な解決策が模索されていますが、新興国経済の成長に伴うパーム油需要の高まりを前に、効果が出ていないと言われている状況です。パーム

油はエビやバナナなどと異なり、最終的な商品のなかで、どのようになっているか、どの程度、使われているのかが見えにくい一次産品であり、消費者が消費行動を通じて問題への対応をとりづらいうことも、解決を難しくしています。政治、経済、

レポート Report

パプア新ギニアでのアブラヤシ農園の影響

デッキー・ルマロペン / Deky Rumaropen
パプア農村発展財団 YPPMD 代表



インドネシア領パプア

パプアはニューギニア島の西半分です、今はインドネシア領になっています。パプアでは1980年代初頭、ソロン、マノクワリ、ナビレという地域でアブラヤシ農園の投資調査があった。そして1982年、パプア・ニューギニアとの国境沿いにあるアルソ現在のケローム県で5万ヘクタールのアブラヤシ農園が開発された。ケローム県で操業するパーム油

であった野生動物も減少し、村の近くでは狩猟ができなくなった。経済面でも、パプア住民にとってアブラヤシ農園の恩恵はあまり期待できるものではない。

事業による影響は様々な場所に現れている。まず環境面では、多様な植生が失われ、アブラヤシという単一作物が広大な地域一帯を占めるようになった。これにより、パプア先住民の主食であるサゴヤシの生育地がアブラヤシ農園に転換されてしまった。地元住民の重要なタンパク源

アブラヤシ果実の一房の価格は1030ルピア(約9円)にすぎず、重いアブラヤシの果実を運び出す作業にしている。インドネシア各地からの移住民の方が能力、経験、勤勉さという点でアブラヤシ農園の仕事に有利であり、経済的恩恵を受けている。アブラヤシ農園企業は地元のパプア住民にはよい影響は与えていないというのだ。悲しいことに、ケローム県のアブラヤシ農園開発では、農園のために土地を提供した先

社会、環境、と様々な形で矛盾をはらみながら拡大するアブラヤシ農園開発は、現代の消費社会の影の部分も体現していると言っても過言ではなさそうです。

【注】日本語訳：アジアのドラマー 諸国民の貧困の研究(上・下)『東洋経済新報社、1974年』

住民族が被った様々な損害に対し、企業は何も補償していない。現在、住民は5万ヘクタールの土地をめぐる、ケローム県のアブラヤシ農園企業を訴えている。

パプア先住民には嫌われているアブラヤシ農園だが、2016年現在、ジャヤプラ県で林業およびアブラヤシ農園の投資企業は68社にのぼる。これらの事業がすべて開発されると30万ヘクタールを超える広大な森林地帯が更地にされ、そこにアブラヤシが植えられることになる。現在、その事業は急ピッチで進められている。ある試算によると、アブラヤシ農園1ヘクタールあたり20人の労働者が必要ということで、将来アブラヤシ事業が拡大すれば、インドネシアからの移住民が数百万単位で増えることになる。農園を警備する国軍が増強されることも確実だ。わたしたちパプア人にとってアブラヤシ農園の開発は大きな脅威となっている。

ネグロスと東ティモールの若手農民が出会った — 交流プログラムを実施しました

寺田 俊 / たらだ・しゅん
APLA事務局

2016年10月、ネグロスと東ティモールの若手農民の交流プログラムを実施しました。目的は、お互いの知恵や経験、悩みなどを共有し、将来につながる気づきや学びを得ること。そしてAPLAが掲げるアジアの「Linkage（つながり）」を次世代にも作っていくこと。東ティモール・エルメラ県の若手農民3人と同行スタッフ1人が、フィリピン・ネグロス島のカネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KFR)を訪問し、5日間様々な体験を通して学び合いました。

初日の夜にオリエンテーションを開き、お互いの言葉や文化、歴史を紹介するところから始まり、翌日から実際に農場に出て、知恵や意見の交換をしました。KFRの有機複合循環型有機農業の実践と次世代農民を育てていく取り組みに感銘を受ける東ティモールのメンバーと、自然をよく観察することや水源保全の方法に新たな気づきの若手農民へと受け継がれたのです。

水源保全の実践を一緒に

東ティモールのアグスが中心になって、「重要なのは水源や周辺の土地の様子をまずよく観察すること」と、水源保全の重要性とプロセスを説明。組石をして整備したことで、ごんごん水が湧いてきて溜まってくる様子が確認できました。その後は、土手を掘るグループとそこに植える植物を集めるグループの二手に分かれて作業を進めました。水源の上方にこうした土手を作ること、溝に敷いた枯れ葉や草などが雨水を吸収し、土砂が流れ落ちるのを防ぎ、水源に水を供給する源になるのです。



5日間に体験したこと、そこから学んだポイントなどをすべて紙に書きだし、交流を通しての気づきや学びを発表しました。

きを得ていたネグロスのメンバーの様子が印象的でした。農場内での交流のあとは、KFRで研修を受けた若者たちが、卒業後に自分たちの地域でどのように農業を実践しているのかを見学するため、2つの地域を訪問。最後の夜には、全員でプログラムの振り返りをしました。

ネグロスと東ティモールについて学ぶ

まずは、アイスブレイクとして、お互いの言葉の基本的な挨拶などを紹介しあいました。それぞれスペイン語、ポルトガル語の影響も関係しており、似たような単語が色々と飛び出してきたので、それだけで一気に心の距離が近くなったようでした。こうしたアイスブレイクを終えて、オリエンテーションを開始。まずはフィリピンから、KFRのスタッフであるエムエムが、ネグロス島の基礎情報と歴史について

卒業生二人を訪問

第3期研修生であるジョナンの畑を見学。豚を飼育し、畑と田んぼ、そして養殖池とKFRで学んだことを実践しています。小規模とはいえ、本格的な養豚の実践例が少ない東ティモールの3人にとっては、まったくレベルの違う世界。病気の対策や餌のことで、熱心に質問をしていました。逆に、ジョナンからは、「細々と植えているコーヒーの収量をあげるための方法を教えてほしい!」というリクエストがあり、東ティモールからカットバックの方法を伝授することに。実践に基づいてこそ語れる細かな注意点をしっかりと伝えている姿を見て、エルメラでこの技術がしっかりと定着しつつあることを実感しました。

第4期研修生のマイケルの農場も訪問しました。一時期は、豚の餌を買うお金がなくバコロドの街にハウスボイとして出稼ぎに行ったことがあるマイケル。「また出稼ぎに行きたいか?」という質問に対して、「ハウスボイの仕事が嫌というわけではないけど、行きたくない。だって



3本の枝と紐と石を使ってできあがった「Aフレーム」と呼ばれる道具を使い、傾斜地の水平を確認しながら等間隔に杭を打ち、その場所をつないで畝をつくる。



湧き水内にある枯れ葉やゴミをきれいにするところから始め、周りの土を掘って、大小の石を組んで、ひとまずの作業は完了。

説明しました。長年の植民地支配、日本軍による占領など、東ティモールの歴史的背景と共通点が沢山あるということも学びました。つづいて、同じくスタッフのジョネルがKFRの概要を説明しました。以前こうした役割は、APLAと長年活動を共にしてきたアンボさん(元KFR代表)が担っていましたが、2016年1月に彼が急逝した後は、若手のスタッフが引き継いで頑張っています。今度は、東ティモールから同行スタッフのパウラが基礎情報と歴史について説明し、農民の活動について説明。コーヒー以外の作物の多様化から、現在力を入れて進めている水源保全活動まで、自分たちが

僕は農民だから!という答えが返ってきて、みんな拍手喝采。東ティモールのメンバーからは「多くの種類の果樹や野菜を育てているし、養豚、養殖池と学んだことを実践しているに尊敬する。手本にしたい」という声があがっていました。

多くの刺激と、気づき

ネグロスのメンバーたちからは、「本当によい交流だった。お互いの言葉は分からなかったが、心は通じ合えた。とにかく楽しかった。水源保全をした時、石を積み重ねるのではなく、コンクリートを使えばよいのではないかと初めは思ったが、東ティモールのみんなに自然のものを使う大切さ、水や土を守っていくことの重要性を教えてもらい、忘れかけていたことに気づかされた。これからは大切に一緒に作りたい。泉を大切に守っていききたい」と話しています。交流2日目には「すぐには難しくても、自分たちもエルメラにいつ



ジョナンの家の前にて。プログラムが進むにつれて、みんなの表情がよくなっていくことが印象的でした。

学んで実践してきたことを説明してくれました。

農場に出て

まずは農場内を端から端まで一周じっくり見学。KFRのスタッフにとっては、自分たちの活動を外部の人に説明するのも大切な経験です。その途中、傾斜地で野菜を植えていない場所を見て、簡単に水平な段々畑を作れる技術(Aフレーム)があると東ティモールから提案がありました。実はこの技術、5年前にフィリピンと東ティモールの農民が交流した際にフィリピン側から伝えられた技術です。時が経ち、フィリピンからの昔ながらの知恵が東ティモールの若手農民によりネグロス

かこんな農民たちが学べる場所を作りたい!という声で東ティモールからあがっていて、交流のもつ力を実感しました。他の国の農民と交流し、自分たちの活動について話し、それに興味を持ってもらえたことで自信につながったのではないのでしょうか。たった5日間ではありましたが、彼らに多くの刺激や気づきがあり、今後の暮らしに大きな影響を与えるであろう実のある交流となりました。最後の夜は、お酒の力も借りて通訳なしで0時過ぎまで盛り上がったようです。■

03

カネシゲファームの ドタバタ騒ぎ



寺田 俊 / たらた・しゅん
APLA事務局



軽トラで石を運んできた!

ネグロス島の農民のパートナーであるカラバオ(水牛)。耕すのも、モノを運ぶのも、ときには移動もカラバオ。ですが、東ティモールのコーヒー産地では、カラバオを持っていく農民は少なく、まず人が手を動かします。交通機関がないなら歩いていきます。

2016年10月にカネシゲファームでネグロスと東ティモールの若手農民の交流を実施しました(詳しくはトビックスのコーナーで)。東ティモールの若手農民の3人は、カラバオを使って土地を耕すことは初めての体験でした。カネシゲファームのレネが手伝いながらやってみてもどうしてもへっぴり腰になってしまいます。それを見ているネグロスの仲間たちは、大盛り上がり!

地域性とはおもてなしの心

さて次は、ここ数年水源保全活動に力を入れている東ティモールからネグロスにその技術や知恵を伝授する番です。農場内にある湧き水をきれいに掃除し、周りの土を掘って、大小の石を積み重ね、泉を作ります。ネグロスのメンバーたちが石を集めてきて、経験のある東ティモールのメンバーたちが石をバズルのように組んでいきます。

石をたくさん集めるために農場内に散り、石を拾っては運び、拾っては運びを繰り返すネグロスのみんなしかし、しばらくするとバタンと誰も来なくなったのです。休憩をしているのかなと思っていると、東ティモールの3人から「カラバオで運んでくるんじゃない?」と冗談が。ははは!と笑っていると、なんとそこに現れたのは軽トラック!! 荷台にたくさんの石を積んで、にやにやドヤ顔で帰ってきました。これには全員爆笑。

すぐに手を動かすことを考える東ティモール。あるものでどうにか楽できないかと頭をひねるネグロス。足して2で割りたいものです。モノが溢れ、なんでも機械やインターネットに頼ってしまう多くの日本人に比べたら、両者とも遥かに豊かですけどね。

01

カカオ **kakao kita** カタキタ

カカオ民衆交易奮闘記

17

津留 歴子 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



道路工事の様子。

パラダイス・パプア

12月に入ってから、ジャヤブラ(パプアの州都)では雨の日が多くなっています。パプアで雨というと、大地への恵み、と大らかに考えていたが、最近「がけ崩れが起きないかしら?」という心配が頭をよぎります。というのも、ジャヤブラの町では山肌を大きく削った道路拡張工事がある。道端には「雨の日は落石に注意」という立て看板はあっても安全対策はありません。ジャヤブラ県ではコンテナ貨物専用の港の建設計画があり、まずはそこに通じる道路を建設しているようです。同県ではまた、30万ヘクタールを超えるアプヤシ農園の開発が進んでおり、まず予定地の森林が伐採されています。そして行く行くはパーム油を運ぶトラックがこの貨物港を利用することになるでしょう。カカオキタが産地に買付けに行くとき、コンテナ車と次々にすれ違います。するとパプア人の運転手は必ず「木材を積んでいるんだぜ」と苦々しく呟くのです。話は変わりますが、カカオキタは近々手作りチョコレートを地元パプアで販売します。カカオキタが買付けたパプア産のカカオ豆に砂糖、ミルクなど最小限の原材料を使用したカカオ本来の美味しさを味わえるチョコレートです。このチョコレートの名前を考えたとき、豊かな自然に恵まれたパプアを象徴する言葉は「パラダイスだ」ということで、「パラダイス・パプア」と名付けました。しかしパラダイスを謳歌する一方で、パプアの人びとはインドネシア各地から押し寄せる移住民、資源が搾取される巨大開発を目の前にして、「ちょっと待てよ、誰にとつてのパラダイスなんだ?」と考えさせられるのです。パラダイス・パプアには自然への賛美とそれが失われていく恐れが表裏一体となっています。パプアの人びとにとって自然と共生しながら豊かな心で暮らせるパラダイスがいつまでも続きますように、という切実な願いが込められているのです。

04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? 05

『パリ20区、僕たちのクラス』 (原題) Entre les murs (2008年、フランス)
【監督】ローラン・カンテ 【原作/脚本/出演】フランソワ・ベゴド

重政 栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



『パリ20区、僕たちのクラス』
発売元: 紀伊国屋書店 (原盤)

舞台はパリ20区のとある公立中学校。主人公は国語(フランス語)教師のフランソワ。この学校での教師と生徒の一年が描かれる……。

20区はパリの郊外、移民が多く住まう地域。フランソワが受け持つクラスの生徒24人も国籍、宗教、家庭環境など実に多種多様。アフリカ系であっても出身地(国)はいろいろ(カリブ出身者もいる)。出身地の違いで生徒同士がいがみ合う場面もある。

また、フランス語が母語でない生徒もいる。親がフランス語を全く話せない生徒もいる。不法滞在で親が警察に検挙されてしまう生徒もいる。ただでさえ難しい(めんどうきい)年頃の子どもたちが相手だ。教師たちは日々、苦悩・苦闘しながら生徒に向き合う……。

ここには、親に連れられて(自らの意思ではなく)フランスにやって来た子どもが数多くいる。移民二世である。近年、欧米各国の現地社会に受容されず、疎外されたそんな若者たちの

その壁はいつか「壁」がある……

不満が様々な社会問題を生み出している。問題の根は深く、複雑で、簡単な解決策はないが、教育がその一つであることは間違いない。特に誰もが無料で受けることができる公教育の役割がより一層重要である。これは日本も他人事ではない。

原題の『Entre les murs』は仏語で「壁の内側」という意味。物語はすべて高い壁で覆われた学内で進み、カメラが外に出ることはない。

生意気な態度で教師に悪態をつき反抗する小憎らしい生徒たちも一歩学外(壁の外)に出れば、厳しい現実の独力で立ち向かわなければならぬ時が来る。もしくは、つまらない校則や横柄な教師の抑圧・管理から自由に羽ばたくことになるのかもしれない。さて、「壁」が意味するのはどちらなのであろうか……。

この学校で働く教員の男女比は、ほぼ同数、年齢も経歴もまちまちだ。しかし、彼/彼女らは全員、生粋のフランス人(白人)であるように見える。一方、掃除人として働くのは移民の女性ばかりだ。こんなところにもフランスの現実が垣間見れる。

欧州先進国の洗練された文化も福祉制度も豊かな生活も、移民による低賃金労働がなければ成り立たない。ここには別の意味の高い壁がある。

02

ひろつぐとゆうこの 百姓の100章

A Farmer have One Hundred Stories.



斎藤 博嗣&裕子 / さいとう・ひろつぐ&ゆうこ
一反百姓「じねん道」



※「一反百姓「じねん道」の自家採種のタネは、APLA SHOPで購入できます。

2020年の東京五輪に続き、25年大阪が万博誘致に立候補。政府は「五輪後の景気浮揚策に有効」とした。どれだけ昭和の高度経済成長を夢みるのか、思わず笑ってしまった。今年、第二回パリ万博(1867年)に日本が初参加してから150年目。当時日本美術は注目され、浮世絵をはじめとする芸術の日本ブームは万博を経ておこり「ジャポニスム」と呼ばれ、半世紀にわたり世界を席捲した。浮世絵の構図はそのまま西洋にないアシメトリー(非対称性)であり、平面性や、強調の仕方(フォルム)、色彩、そこに描かれている江戸庶民の高い生活水準と自由な生活スタイルに西洋人は衝撃を受けた。ゴッホの手紙には「日本の芸術家は、明らかに哲学者である。(中略)

一本の草の芽から、やがてあらゆる植物を描く道が開かれる。四季の変化も山野の風景も、動物を、人間を描く道が開かれる。まるで自らが花であるかのように、自然の中に生きている素朴な日本人が教えるものこそ真の宗教ではないか? 僕たちは決まり切った世間の仕事や教育を捨てて自然に還らなければいけない」と日本への憧れが綴られている。

原始的なアニミズムの生命観に源流を持つ日本の自然観「自然におのずからしかり」。日本人にとって、自然は征服すべきものではなく、内なる自然なのだ。百姓は、自然と地球と共に暮らしてきた。地球の気候は「地と空が共鳴する緑地気候」で地球全体が「緑の生命連鎖」でつながっており、まさにタネ時きは、地球をキャンバスに『緑の地上絵』を描くこと! 自家採種のタネを地上に蒔き、一粒一粒のタネの命が、地表を緑で覆い、日陰をつくり、地表の温度を下げて、眠っているタネを目覚めさせる。地上にいろいろな草木が生えれば、様々な植物や食物が育ち、たくさんの生物が住む。水や空気は植物からつくられ、植物はタネから育つ。生命の源であるタネを蒔く百姓こそ、真のアスリートであり、芸術家なのだ!

APLA 食堂

Kitchen APLA

今日の食材 有頭殻付きエコシュリンプ

吉田友則 / よしだ・ともものり
出張料理「しまぐれや」シェフ

殻は剥いてからがオタノシミ
～二度オイシイのススメ～

なんで海老は殻が剥いてあるのと剥いていないのがあるのだろう？ 不思議に思うことはないだろうか？ むき身、殻付き、頭付きと色々ありますが、ひとつはサイズによる使い勝手で剥いてある、旨味が逃げないように……等々。

今回は有頭殻付きについて。皆さんは剥いてからがオタノシミということをご存知だろうか？ もちろん、頭付きでフライに、殻付きで焼く、それはそれで正解。なかには頭や殻を持って余している方も多いのでは？ 有頭殻付き海老を買ったならば、解凍してはずした頭と殻を袋に入れて冷凍庫へ。2バック使い終える頃にオタノシミがやってくる。頭も殻も料金のうちです！ なおかつ海老の旨さが凝縮しています。

洋食屋さんに勤めていた頃、ジャンボ海老フライなんてメニューがあって、オーダーが入ると大きなブラックタイガーの殻を剥き、頭付きで揚げていましたが、大量に出る殻がねえ。これらを冷凍庫に用意した袋に入れておいてもらい、1ヵ月もすると殻だけでもかなりの量になりました。それを焼いて野菜などと煮込み続け濃厚な海老のソースをつくって、それをグラタンに入れたりパスタにしたり。具材いらさないよね？ ぐらい海老の旨味がつまったデミグラスソースのような色のソースが鍋のそこにできるとニヤニヤしたものです。

じゃあ二度オイシイのもう一つは？ そうですよ。その殻が包んでいた身です。一般のエビは生食できるタイプや加熱するタイプなど色々ですが、加熱するタイプでお話すると、まず出てくるのが「火にかけると小さくなっちゃうのよね」。ハイ確かにそうなんです。中の水分が抜けていくのももちろん小さくなっていきます。中には保水剤などで見た目を維持しているタイプもありますので。エコシュリンプは使用していません。かといって縮まないわけではないのですが、自然な環境の中で育てているので、身の濃度が素材としての「顔」



かな、と僕は思ってます。それを活かす料理をしたいと思い、下準備としてこんな仕込み方をしていますのでご紹介します。

キッチンペーパーで剥いた海老の水気を取ります。フライパンに入れて身が浸る程度のオリーブオイルを入れます。弱火にかけ、低温のオリーブオイルで煮ます。色が変わってきたら返します。大よそ5分程度で、底から小さな気泡がプツプツとあがってくる感じです。そのまま冷まし冷蔵庫に。オイルでコーティングされているので酸化も遅くサラダにつかうならそのまま。パスタに入れるなら、仕上げにパスタとソースとからめてあげるくらいで充分です。海老の旨味、食感があり「ああ海老食べているな」という実感あります！ オススメです。

二度オイシイ海老のススメでした。お試しあれ。■



エビの殻とオリーブオイルと合わせる。

Recipe

ATJホームページに、有頭殻付きエコシュリンプでつくる濃厚な万能エビソースのレシピが掲載されています！

<http://altertrade.jp/archives/13241>

筆者プロフィール

出張料理「しまぐれや」シェフ 吉田友則

製菓製パンの専門学校で勉強した後、料理の世界に入る。長野県八ヶ岳の井出忠利氏に師事し、ジャンルに囚われない季節感を大事にした料理を目指すべく海外に渡る。帰国後、イタリアン、フレンチ、洋食屋などで経験を積み、口福感の残る料理を提供すべく独自の活動を展開している。日本一移動するレストラン「しまぐれや」は16年目を迎え、開けたドアは2400軒。



自慢する人

佐藤友子 / さとう・ともこ
キッチン・ハリーナ店主

13

年前、バランゴンバナナとマスコバド糖で作ったケーキやフェアトレード

コーヒーを出したくて開業したキッチン・ハリーナ。お店には、たくさん「友産」おまかせ便が届きます。おまかせ便はスーパーや生協の買いかたとは全く違う醍醐味があります。何しろどんな種類の食材がどれだけの量入っているかわからない！ 野菜の土を洗い流したり、魚の鱗や内臓を取ったり、肉の筋切りなどの下処理をしながら、どう調理したら美味いかな？ と思いを巡らす時のワクワク感が大好きです。

2011年3月。私は祝島を訪ねました。30年もの間、上関原発建設に反対し続けている祝島の人びとに会ってみたいと思ったのです。以来、私の祝島通いは続いています。3人以上で行く場合は大抵「上関の自然を守る会」の高島美登里さんにエコツアーをお願いしています。奇跡の海と言われる上関の自然海岸を味わいながら、原発予定地の田ノ浦を回ります。船を操縦してくださるのは室津の漁師・小浜治美さん。祝島と違い、半島側の町の人たちの多くが原発推進派のなか、小浜さんは室津

わたしの友産友消じまん 11

上関の自然を守る会のお魚便の巻



おまかせ便到着！



茹でたての蛸。

で原発の建設に反対しているたった一人の漁師です。2013年の夏に祝島を旅した際、高島さんが「キッチン・ハリーナに小浜さんの魚を定期的に送りますよ。うか？」と天使のようにささやきました。それから月に2回、クール便で様々な魚や貝が届きます。魚図鑑と首っ引きして、毎回のよう電話

で小浜夫人に美味しい食べ方を教えていただきました。こうして始まったお魚便は6年目を迎えます。小浜さん1人から、今では8人の地元漁師さんがお魚を提供してくれています。定期購入者数は40人を超えました。高島さんたちの「原発に頼らない町づくり」という天使の思惑は、地元の漁師さんや奇跡の海を守りたいという支援者を巻き込みながら着実にふくらんでいるようです。■



祝島の波止場で。(左端が筆者)

祝島の地域猫。

From Negros, Philippines [ネグロスより]

KF-RC研修第7期生たち
を迎えて

2016年8月
からカネシゲ
ファーム・ルー
ラルキャンパス
(KFRC)では、
第7期生3人の
研修が始まって
います。全員が
農村部出身。家

族の収入の大部分はサトウキビ農園で働いて得たものです。ほとんど自家消費にまわりますが、家の畑では米や野菜、様々な種類のバナナや果物を植えています。町から離れた山の上に家があるので、車が入らず、市場に野菜などを売りに行くときには、カラバオ(永生)で運んだり、担いで持っています。

KFRCにやってきた当初は皆とてもシャイで、おとなしかったのですが、寝食共に過ごしていくなかで、だんだんと打ち解けていきました。初めは自己管理ができなかったり、スタッフの言うことを勘違いするときもありました。料理もできませんでした。常にスタッフがサポートし、適

宜話し合い、ときには注意もします。彼らの個性を知るために必要に応じて親にも連絡を取っています。これらの経験を通じて、半年の研修の間お互いに理解が深まっています。

研修で学びを深める

研修生たちは、家庭の事情でハイスクールを卒業していません。今後も就職して働くことは難しいでしょう。研修生のひとりは、首都マニラに運送業の手伝いとして働きに

出ましたが、うまくいかずに地元に戻ってきて家の畑やサトウキビ畑で働きました。そんなときにKFRCのことを家族や地域の人から聞き、有畜複合循環型有機農業を自分の畑でも実践しようと、KFRCの研修へ参加することを決めました。

研修では、家畜の世話や糞尿の使い道、化学肥料との違いを理解していきます。土づくりや、苗を育て、種取りもして、その大切さも学び、自然の循環や自然環境を守って

いくことが農家にとってどれほど大切なのか体得していきます。農場にやってくるお客さんと対話しながら自分が育てた野菜を売ることで自信にもつながってきました。農場での共同生活をしていくなかで、責任感や仲間の大切さも学んでいきます。

研修生たちは、将来自分たちが地域に戻り、教える側になれるよう努力しています。研修中にわからないことがあれば質問しノートに取ります。5ヶ月が経ち、以前と比べると質問の内容は具体的で注意深くなったように思います。

卒業後も寄り添う

第7期生の3人は「豚や鶏など多くの種類の家畜を育てながら、農業をやっていき、家族を支えていきたい。そしていつかは畑を広げ、その地域の農民仲間の模範となり、自分の生産物をたくさん販売したい」と話しています。しかし、学んだ多くのことや経験を卒業後に自分の畑でどう生かすかは彼ら自身です。



スタッフと畑で作業する研修生たち。

3人のうち2人は15歳と16歳で、まだ幼く、「卒業後に自分自身で畑の計画を作り、実行していける」、「立派に自立していける」とは言えませんが、もう1人は27歳で、しっかりして自分で畑を管理していけそうです。色々な計画を実行してくれることを期待しています。そういった点では、KFRCは彼らが卒業をしたあとに、それぞれに合ったフォローアップが必要です。学んだことを具体的に実践していけるように、家族とも適宜連絡を取り合い、寄り添っていきたくと考えています。

(カネシゲファーム・ルーラルキャンパス事務局長・エリマー(エムエム・トダハツ) ■

【事務局だより】

事務局の動き(2016年11月～2017年1月)	
11月 4日～16日	グリーンコープ共同体「fromネグロスセミナー」が開催され、野川、寺田が各単協を訪問しました。【(鳥根)、おおいた、(長崎)、みやざき、おかやま、かごしま、ひろしま、くまもと、おおさか、ひょうご、やまぐち(開催日順)】
11月 11日	パルシステム埼玉(蓮田・伊奈・白岡地区会)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 12日	WE21相模原で、東ティモールの事業報告会が開催され、野川が報告しました。
11月 25日	パルシステム東京で「カカオから作る手作りチョコレートワークショップ サポーター講座」が開催され、野川が講師を務めました。
11月 26日、27日	コピス吉祥寺マルシェに出店しました。
11月 28日	パルシステム東京(南綾瀬)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
11月 30日	友産友消のススメ⑤を開催しました。
12月 4日	東京朝市アースティマーケットに「P to P cafe」として出店しました。
12月 6日	「ホンモノの手作りチョコレート」を広めるカカオ大使になろう!の講座を開催しました。
12月 7日	恵泉女学園大学の授業で野川が講義しました。
12月 8日	武蔵大学の授業で大久保が講義しました。
12月 10日	平成28年度地球環境基金活動報告会に野川が出席しました。
12月 13日	友産友消のススメ⑥を開催しました。
12月 18日	第10回国際有機農業映画祭に出店しました。
12月 19日	佼成学園女子高等学校の授業で吉澤が講義しました。
12月 20日	パルシステム東京(清瀬)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 11日、12日	地球環境基金の若手プロジェクトリーダー研修に野川が参加しました。
1月 14日	新宿エコギャラリーで「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 15日～23日	東ティモールへ野川が出張しました。
1月 23日	hako gallery(東京都渋谷区)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 24日	パルシステム埼玉(蕨地区)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 25日	パルシステム東京(福生)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。
1月 29日	東京朝市アースティマーケットに「P to P cafe」として出店しました。
1月 29日	ヤナギコーヒー(埼玉県飯能市)で「ホンモノの手作りチョコレート」ワークショップを開催しました。

事務局からお知らせ

APLAでは新しいサポーター制度の準備を始めました。

APLAでは、2017年3月より新しいサポーター制度を導入し、新たに「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を設置することを決めました。会員の皆さまには、追って詳細をご連絡いたします。

以下の呼びかけに賛同・協力しました。

- プロサバナ賛同署
- 懸念と要請の手紙「やんばるの森を世界遺産に」

「福島の子もたちに届けよう バナナ募金」へご協力を!

17施設、約1300人の子もたちへバナナの発送を継続してきていますが、募金額が減少しております。皆様のご支援・ご協力、よろしく願いたします。

編集後記

私事ですが、昨年から母の介護に追われて気が付けばアツという間に新年……一面雪に覆われた故郷で、トロピカル・アジアへ思いを馳せつつ、介護という仕事に携わる人びとに最高の敬意を払いたい、と心から思うようになりました。かつてネグロスで、身体が不自由になったり、認知症を発生したお年寄りをたくさん見てきましたが、特に田舎では、遠い親戚まで含めた家族や近所の人たちが支えあって、年寄りたちが地域に自然に溶け込んで生活している様子に驚いたことを思い出しています。あの豊かさを今後どんどん高齢化する日本社会は取り戻すことができるのだろうか? まずは我が家族とお隣さんとの関係づくりから始めよう、と奮闘しています。皆さま、今年もよろしく願いたします。(大橋)

今回Voice from APLA partnersの原稿を書いたのは、新しくKF-RCの事務局長になったエムエム(エリマー)くん。8年前には本人も第1期研修生として農場にやって来た。とてもかわいかった彼も最近では貫禄が出てきた様子。成長したなあ。手書きで作成した原稿を、facebookのメッセージャーでテキストを打ち込み日本に原稿を届けてくれた。超アナログと最新技術を駆使しての初寄稿! 今後事務局の仕事もできるように、パソコンスキルを身につけたいとメッセージがあった。頑張れ!(吉澤)

自分はアブラヤシとは関係ない、と言える人はほとんど皆無だと思う。アブラヤシ農園開発による深刻な環境問題や生産地の地域社会への影響については、特集で報告していただいた通りだが、食用油として消費される際のトランス脂肪酸の危険性も見逃せない。パーム油の問題について、イラストや動画などでわかりやすく伝えてくれるウェブサイトがある(<http://plantation-watch.org/abunaiaabura/>)。アブラヤシの問題を誰かに伝えたい!と思ったあなたに今号の特集とあわせておすすめします。(野川)

ハリーナ
HALINA

2017年2月号 vol.02-no.35
2017年2月1日発行

【編集長】
大橋成子

【編集者】
吉澤真満子
野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あふら:Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL <http://www.apla.jp>

【印刷】
株式会社セイズ